

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和6年4月16日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

学校名 品川区立伊藤小学校

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（国語）

1 国語の定着状況についての概要

ほとんどの学年において、校内平均正答率が目標値を上回った。結果はおおむね良好である。

2 具体的な課題

- 第2学年…正答率が目標値より0.3ポイント低く、活用が3.6ポイント低い結果となった。具体的には「見たことをもとに発表する」、「文章を書く」のように、考えさせる問題について対応できない課題がある。
- 第3学年…ほとんどが平均値を超えている。しかし、目標値が下回っている項目のうち「書くこと」、「物語を読み取る」の正答率が特に低いところに課題が見られる。
- 第4学年…言葉の学習において、ローマ字で表記されたものを正しく読む問題で、正答率が約10ポイント下回った。また、主語と述語との関係についての問題で約2ポイント下回っている。このことから、言葉の働きの問題に課題がある。
- 第5学年…修飾語の問題で正答率が目標値を、5～10ポイント下回っている。また、漢字の読み書きで全6問中4問が目標値と同程度となっている。このことから、言語関連の問題に課題がある。
- 第6学年…ほとんどが平均値を超えている。しかし、目標値が下回っている項目のうち「登場人物の心情」、「文章の中で、文脈に沿った漢字を適切に使っている」の正答率が特に低いところに課題が見られる。

3 課題の原因として考えられること

- 第2学年…初めての学力テストであり考えさせる問題に慣れていなかったことが考えられる。
- 第3学年…「書くこと」では、漢字の定着につながる十分な学習ができていない。「物語を読み取る」では、文章から設問に対する正対した答えを導き出せていなかったり、問題の意味を理解できていなかったりすることが考えられる。
- 第4学年…言葉の働きの学習は、短い単元で扱われることが多いため、学習の定着のために十分な時間をかけられなかったと考えられる。
- 第5学年…修飾語としては取り上げられた際に解く問題であり、日頃から意識していないため。また、ICT機器（タブレット）の活用頻度が増え、字を書く頻度が減ったためと考えられる。
- 第6学年…登場人物の心情を捉える学習に十分時間をかけられていなかった。タブレット学習の時間も増え、漢字の定着がされていない部分が多かったと考えられる。

4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

- 第2学年…学習の振り返り際には、文例を提示し、自分の考えを書く経験を積ませる。情報を読み取る学習の際には、時間を掛けて丁寧に指導していく。
- 第3学年…漢字学習については、反復学習を意識的に行い家庭学習の中でも確実に取り組んでいくために家庭と連携し、定着を図る。読み取りについては、音読と併せて読書活動を意識的に取り組み、活字に慣れさせていく。
- 第4学年…言葉の働きについての学習をする際は、授業で学んだ内容を、家庭学習や朝学習でも取り組み、学習内容の定着を図る。
- 第5学年…文章を読み取る際に、意識的に修飾語関連を取り上げる。漢字を書く機会（復習テストなど）を設ける。
- 第6学年…朝学習の時間を活用して漢字の学習の定着を行う。国語の学習でも漢字を書く機会を多く設定して漢字にふれる時間を増やしていく。

5 次年度の数値目標（成果指標）

領域別正答率で見た場合、全学年、全領域で校内平均正答率が目標値を上回っていないため、次年度は全ての領域で目標値を上回るようにする。

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった 課題と学力向上に向けた取組（社会）

1 社会の定着状況についての概要

第4学年・第5学年は観点別正答率が目標値を上回った。第6学年は観点別正答率において知識・技能を除いて目標値を上回った。結果はおおむね良好であるが、地理的環境についての理解は比較的低い傾向にある。

2 具体的な課題

第4学年…領域別正答率では「地域や市の様子」の校内正答率が目標値を4.9ポイント下回っている。問題の内容別正答率では「安全なくらしー火事」が目標値を下回った。

第5学年…領域別正答率では「自然災害からくらしを守る活動」の校内正答率が目標値を0.78ポイント下回っている。「緑のダムの仕組みを理解している」では目標値に対して10.0ポイント下回っている。

第6学年…領域別正答率では「国土の自然などの様子」の校内正答率が目標値を10ポイント下回っている。観点別正答率を比較すると知識・技能のみが目標値を下回っている。

3 課題の原因として考えられること

第4学年…地図記号の理解をもとに地図を読み取る力が十分ではない。また、緊急時対処する体制に関する知識の定着が十分ではない。

第5学年…資料の読み取る力と「緑のダムの仕組みについて」の知識の定着が十分ではない。

第6学年…日本と関係の深い国々の位置や国旗および日本の主な地形の位置や名称の理解が十分ではない。資料を読み取る力が十分ではない。

4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第4学年…地図記号に慣れ親しむことができるよう、授業で地図帳を活用する。また、小テストの機会を充実させ、知識の定着を図る。

第5学年…資料の活用の仕方を改めて指導すると同時に、資料を読み取る学習活動を多く設定する。タブレットや小テストを用いて、言語のインプット・アウトプットを繰り返し行うことで知識の定着を図る。

第6学年…世界や日本の国土の学習において、活動の目的を明確にした上で、児童が主体的に調べ活動を行い、児童主体で学びをまとめる学習展開を充実させる。

5 次年度の数値目標（成果指標）

観点別正答率でみた場合、知識・技能において、目標値を+5ポイント上回るようにする。その他の領域においては、引き続き、目標値を上回るようにする。

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（算数）

1 算数の定着状況についての概要

ほとんどの学年において校内平均正答率が目標値を上回った。おおむね良好である。

2 具体的な課題

第2学年…「3つの数の計算」の立式において17ポイント下回っている。ひき算の文章問題作成において9ポイント下回っている。

第3学年…どの設問も正答率が目標値を上回っている。その中でも、目標値との差が一番大きい「たし算・ひき算」で、4.1ポイントである。

第4学年…どの設問も正答率が目標値を上回っている。その中でも、「かけ算の筆算に出てくる数の意味」や「円の半径についての理解」が十分ではない。

第5学年…領域別正答率では目標値が下回っている領域はないが、設問ごとにみると「平行四辺形の作図する」に関しては、目標値を29.5ポイント下回る。

第6学年…領域別正答率では「図形」の校内正答率が目標値を4ポイント下回っている。円の直径と円周の長さの関係、立体の体積の理解が十分ではない。

3 課題の原因として考えられること

第2学年…問題文から何を問われているかを的確に捉え、様々な文章に対応する力が十分ではない。

第3学年…計算後に確かめをする時間が十分でなかったり繰り返り上がり、繰り返り下がりをおぼろげに忘れてしまったりしていることが原因であると考えられる。

第4学年…「あたり量がいくつ分」というかけ算の言葉の意味の理解と、円の定義や性質の理解が不十分であると考えられる。

第5学年…作図する力や数字を数直線などで捉える力から十分ではないことと考えられ、抽象的な事象を具体化する活動が苦手であると考えられる。

第6学年…平面図形や立体図形の見取図からそれらの構成要素(各辺の長さ)を捉える力や、構成要素同士の関係(直径と円周など)を捉える力が十分ではない。

4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第2学年…文章題を作成したり発展問題に取り組んだりする活動を行い、応用力を養う。

第3学年…日頃の学習で見直す時間を設定し、確かめをするよう指導する。

第4学年…朝学習で復習し習熟を図るとともに、かけ算の問題を図や表で表す活動や作図をする活動を行い、具体的に数字を捉えたり表したりする活動を十分に行う。

第5学年…文章問題を図や表で表す活動や作図をする活動に十分に行い、具体的に数字を捉えたり表したりする活動を十分に行う。

第6学年…平面図形では実際に作図して図形を捉える活動や、立体図形では実際に立体を触ったり動かしたりする活動を十分に行い、図形感覚を豊かにする。

5 次年度の数値目標（成果指標）

領域別正答率で見た場合、全学年、全領域で校内平均正答率が目標値を上回ってはいないため、次年度は全ての領域で目標値を上回るようにする。

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった 課題と学力向上に向けた取組（理科）

1 理科の定着状況についての概要

第4学年校内平均正答率は、全国よりも6.2ポイント、区よりも3.4ポイント上回った。第5学年校内平均正答率は、全国よりも2.3ポイント上回り、区と同程度だった。第6学年に校内平均正答率は、全国よりも2ポイント下回り、区より4.2ポイント下回った。

2 具体的な課題

第4学年…知識は定着していても、その事象を応用して答える問題で選択肢の違いを正確に判断できず、正答率が低い。

第5学年…百葉箱の工夫を答える問題では、「風通しのよさ」と「直射日光を防ぐ」の両方を満たすものが正解だが、約25%の児童は「風通しのよさ」のみを満たしている選択肢を選んでいる。複数要素を考慮する問題の正答率が低い。

第6学年…自由記述問題の正答率が低い。食塩水から食塩を取り出す問題では、液を冷やしても取り出せないという答えは知っているが、理由を説明できていない。選択肢の正答率50%に対し、説明まで正答した児童は23%と半数以下である。

3 課題の原因として考えられること

第4学年…問題文の読み取りに課題がある。また、授業で扱っていない事象は分からないといった既習事項を応用する力が低いと考えられる。

第5学年…正答率が目標値を下回った問題は、複数の根拠を問われるものが多く、なぜそのような実験方法をとったかといった根拠を理解できていないことが考えられる。

第6学年…正答率が目標値を下回った問題は、ある実験結果が出た意味や実験方法設定の理由を問われるものが多く、根拠を踏まえた理解ができていないと考えられる。

4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第4～6学年…授業の中で問題解決学習のサイクルを繰り返し体験させる。予想や考察には根拠（理由）が必要であることを徹底して伝え、自然事象と理由を結び付けて覚えられるよう指導する。第5～6学年では、予想や考察を自分なりの言葉で表現できるよう指導し、記述問題への抵抗感をなくす。

5 次年度の数値目標（成果指標）

- 第4・5学年が来年度、どの項目でも目標値を上回る。
- 自由記述問題の未回答率を現在の約10%から5%未満にする。

令和6年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（英語）第6学年

1 英語の定着状況についての概要

問題の正答率では、ほとんどの項目で目標値の±5ポイント以内を記録する結果となった。全国正答率と校内正答率の対比においても、おおむね全国正答率を上回っている。JTEと担任との協力体制の下、レッスンプランを綿密に考え、表現活動に取り組めるよう指導を工夫してきたことが、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の結果につながったと考えられる。しかし、英文の完成（もの・場所の表現）や英作文（できること・性格）に関しては、目標値・全国正答率の両面において、ポイントが下回る結果となった。また、観点別の正答率では、主体的に学習に取り組む態度が目標値、全国正答率共に下回る結果となった。

2 具体的な課題

- ・「英作文（例文を参考にしながら、自分のあこがれの人について、簡単な語句や基本的な表現を用いて書いている）【その人ができること】」においては、目標値 70.0 に対し校内正答率 57.8 と、12 ポイント以上下回る結果になっている。英作文に関しては、昨年度の調査結果でも課題として上がっていた。
 - ・「英作文（例文を参考にしながら、自分のあこがれの人について、簡単な語句や基本的な表現を用いて書いている）【その人の性格】」においては、目標値 75.0 に対し校内正答率 64.4 と、10 ポイント以上下回る結果になっている。
- 英作文に関しては、昨年度の調査結果でも課題として上がっていた。この結果から、英作文における思考・判断・表現及び主体的に学習に取り組む態度や単語の意味理解に課題があることが分かる。

3 課題の原因として考えられること

- (1) 基礎的な単語の定着が十分ではなく、語彙の量が不足している。
- (2) 一つの単元で学習したことを次以降の単元で生かすことができていない。

4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

- (1) 今回の調査結果を JTE に共有し、児童一人一人が、英語への意欲や必要感をもって学習に取り組めるようレッスンプランを工夫し、学習環境を整える。
- (2) 英語の授業だけでなく、基本的な単語を日常生活の中で使えるよう繰り返し定着を図る。
- (3) 単元で学習した単語を通年で活用していけるよう都度機会をつくり、意味理解への定着を図る。

5 次年度の数値目標（成果指標）

全ての問題において校内正答率が、目標値及び全国正答率を上回るようにする。